

京都大学	博士 (工学)	氏名	詹 慧
論文題目	サービス付き高齢者向け住宅のケアと空間構成に関する研究 - 看取り・重度認知症への対応実態の分析を通して -		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>2011年に国土交通省と厚生労働省の共管により創設されたサービス付き高齢者向け住宅 (以下、サ高住) は、バリアフリー設計、日中の安否確認・生活相談の職員配置を基本条件としたうえで、在宅介護サービスとの連携により、従来の介護施設よりも多様な空間構成や設備の提供 (ハード) と人的サービスの提供 (ソフト) の組み合わせを実現した高齢者住宅である。しかし、サ高住は介護施設と比較して、ハードとソフトの自由度が高いため、集合住宅に類似した形態から介護施設に近い形態まで、その実態は幅広く存在している。そのため、どのようなサ高住が高齢者の終の棲家として機能するのか、重度化対応の実態が明らかになっていない。そこで本研究は、看取り、重度認知症の対応を重度化と定義したうえで、サ高住が終の棲家として機能するための空間構成と介護サービスについて、分析、検討するものである。本論文は、全5章から構成されている。</p> <p>第1章は序論であり、サ高住の登場した背景、既往研究の整理、看取り・重度認知症など重度化に関する用語の定義を示したうえで、研究目的として、サ高住が入居者の終の棲家として機能するには、重度化対応の視点から、重度認知症対応ならびに看取りへの対応が避けて通れず、重度化対応を円滑に実施できる、サ高住の空間構成および併設介護サービスの有り方を明らかにする必要性を論じている。</p> <p>第2章では、サ高住のハードと看取り・重度認知症の対応実態の関係性を把握するために、ハードの各要素と空間構成を類型化したうえで、重度化対応との関連性を分析している。具体的には、まず、調査対象とする全国のサ高住2011件について、住戸総数、各フロア当たりの住戸数、住戸面積、共用トイレ、浴室、食堂などのハードの各要素と看取り・重度認知症を多重比較し、統計的に有意差があるハードの要素を特定した。そのうえで、主成分分析とクラスター分析によりサ高住を類型化し、類型ごとの看取り・重度認知症への対応実態を明らかにしている。その結果、低層でかつ住戸総数やフロア当たりの住戸数が多く、共用トイレ・浴室、食堂などの共用部を複数階に設置するサ高住において看取り・重度認知症に対応している傾向がみられること、各フロアに食堂を設置してフロアで生活がおおむね完結するユニット型において重度化対応が進む一方で、住戸内に台所、風呂などの設備を完備する集合住宅型では重度化への対応がやや弱く、低層階に食堂や共用浴室などの共用設備を設置し上階に30戸程度の住戸数を有する一般的な類型のサ高住では、階数が少なくフロア当たりの住戸数が大きいサ高住において看取り・重度認知症に対応している傾向があるといった実態を明らかにしている。</p> <p>第3章では、第2章で空間構成の視点から確認された、重度化対応との相関の高い共用空間の配置を具体的に示すために、平面図の入手できた442件のサ高住を分析対象として、サ高住の平面形状や設備配置が看取り・重度認知症対応へ及ぼす影響について分析している。その結果、入居者の生活上の移動距離が短くまとめられ、かつ、介護上の機能が近接して配置された空間構成のサ高住において、看取り・重度認知症への対応が行われていること、また、平面構成と重度認知症・看取り対応の関係については、片廊下型では重度認知症・看取り対応のいずれも実施されていないが、ホール型、中廊下・直線型では高い割合で重度化対応している実態がみられることを明らかにした。このことから、スタッフと共用設備が近距離に配置され、動線が短く、見守りしやすい空間構成が重度認知症への対応に有効であることを指摘している。</p>			

京都大学	博士（工学）	氏名	詹 慧
<p>第4章では、全国のサ高住を対象に、どのような種別の介護サービスの併設が重度化対応との相関が高いか、統計的に分析している。その結果、訪問介護を、居宅介護支援、訪問看護、定期巡回と組み合わせる場合と重度化対応の相関が高いことを明らかにしている。また、サ高住の夜間の職員数を増やしても重度化対応に明確な相関がみられないが、夜間の職員体制を訪問系の併設サービスと兼務させる場合に重度化対応との相関が高くなるという傾向を明らかにしている。このことから、重度化対応のサ高住では併設する訪問系サービスの職員とサ高住に常駐する安否確認・見守り相談の職員を兼務させる実態があることを推定し、サ高住と併設する訪問系サービスの職員の連携体制の構築が重要となることを指摘している。</p> <p>第5章は結論であり、本論文で得られた成果について要約している。重度化に対応可能なサ高住のケアと空間構成のあり方に関する知見として、住戸数の確保、各階における共用部の配置に加えて、視線が通りやすい平面形状とすること、また、同じユニット型の空間構成でも、ホール型は片廊下型より対応力が高まること、直線型よりも非直線型が有効と考えうることを指摘している。さらに、サ高住に併設する介護サービスは、通所系サービスよりも訪問系サービスの併設が有効と考えられ、さらに訪問系サービスに居宅介護支援、訪問看護、定期巡回を組み合わせることが重度化対応との相関が高いこと、また、サ高住の職員は、専従とするより、訪問系介護の職員と兼務する体制を組み、併設する介護サービスと連携した職員配置とすることが重度化対応との相関が高いことを指摘している。</p>			

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、看取り・重度認知症に対応可能なサ高住のあり方に関する知見を全国のサ高住に関するデータから導いた実証的研究であり、得られた主な成果は次のとおりである。

1. サ高住の全国に焦点を当てた悉皆研究であり、統計的な分析に基づき、共用部の設備や配置が看取り・重度認知症対応に影響を及ぼすハードの要素を、それぞれ明らかにしたうえで、それらを指標としてサ高住を類型化することで、類型ごとの重度化への対応の実態、特徴を客観的に導いており、信頼性の高い結論が導かれている。
2. 442件のサ高住の平面図をホームページで収集し、平面形状、設備の配置を整理したうえで、サービス付き高齢者向け住宅情報提供システムのデータと符合させ、高い精度で重度化対応の実態を分析している。これにより平面構成の重度化について、同一の住戸数であれば、高層よりも低層が重度化対応しやすいこと、また、同じユニット型の空間構成でも、「ホール型」は「廊下型」より対応力が優れるなど、建築計画上の知見を明らかにしている。
3. サ高住に併設する介護サービスは、通所系サービスよりも訪問系サービスが有効であること、また、サ高住の職員は、併設介護サービスの職員と分けずに、兼務する職員配置体制とすることで、連携しやすく、重度化対応が促進されることを指摘している。また、複数の併設介護サービスの組み合わせに基づき、サ高住の重度化対応の実態を分析し、訪問系サービスを1種類併設するよりも、訪問系サービスに居宅介護支援や定期巡回等の機能を合わせることで、より重度化対応が可能となることを明らかにしている。

本論文は、全国のサ高住の統計分析および平面図の詳細な分析により、サ高住が入居する高齢者の重度化対応するための建築計画に関する知見、介護サービス、職員配置との関連性も踏まえて明らかにしており、学術上、實際上寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士(工学)の学位論文として価値あるものと認める。また、令和6年1月25日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行って、申請者が博士後期課程学位取得基準を満たしていることを確認し、合格と認めた。